

# SHOW HEY シネマルーム

★★★

Data

監督：陳凱歌（チェン・カイコー）  
撮影：張藝謀（チャン・イーモウ）  
出演：王学圻（ワン・シュエチー）  
／孫淳（ソン・チュン）／鹿  
鍾／吳若甫

## 大閱兵

(BIG MILITARY PARADE)

1985年・中国映画・99分

配給／東光徳間

2004（平成16）年6月20日鑑賞

〈シネ・ヌーヴォ・中国映画の全貌2004〉

## 👁️👁️ みどころ

1984年10月1日の天安門広場での閱兵式に参加することは、人民解放軍兵士の名誉。一分足らずの、96歩の行進のために苛酷な訓練を受ける兵士たちの姿を丹念に描く映画だが、その実態は意外と人間的・・・？しかしホントの実態は・・・？

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

### ＜陳凱歌監督の第2弾。なぜ、こんな映画を？＞

1984年に『黄色い大地』で衝撃的なデビューを飾った陳凱歌監督の第2弾がこれ。張藝謀がこの作品でも撮影を担当している。『大閱兵』というタイトルからわかるように、この映画は、1984年10月1日の「国慶節」の日に行なわれる、中華人民共和国の建国35周年を祝う、天安門広場での閱兵式に参加する空輸部隊の若者たちの姿を描くもの。

なぜ陳凱歌監督が、このような「国威発揚」を狙うためだけのような映画を製作したのかは、資料を読む限りでは私にはよくわからない。しかし、各種資料や『中国映画の明星』（石子順著・2003年・平凡社）を読むと、この映画は、1984年の『黄色い大地』に続いて、1985年に製作されたにもかかわらず、1987年春までお蔵入りとされていたとのこと。そして、その上映が許可されたのは、社会情勢の変化の他、陳凱歌監督自身が「現在放映されているのはオリジナル版ではない」と述べているように、内容に修正が加えられたためとのこと。そうだとすると、この映画は、必ずしも中国共産党や人民解放軍の国威発揚だけを目指したものではなく、閱兵式のパレードにおいて、わずか96歩、時間にして1分足らずの行進のための苛酷な訓練に身を投ずる若い兵士たちの心の葛藤や、100%集団化することのできない人間の気持を描きたかっただろうと推測できる。

## ＜大閱兵のイメージは＞

北京の天安門広場で、10月1日の国慶節の日に行なわれる「閱兵式」＝「軍事パレード」は、昔からテレビのニュース等でよく見たおなじみのもの。これと同じような軍事パレードは北朝鮮でも金日成や金正日以下が参列する中、9・9節（1948年9月9日の政権樹立を記念する日）の記念日に開催されている。これを見て、私が思い出すのは、戦前の日本でも敗戦の色濃くなった1943年10月21日、明治神宮の外苑の陸上競技場で行なわれた有名な学徒出陣のパレード。私は戦後59年を経た今の若者の「個人主義」の蔓延や「平和ボケ」に対して、大いなる危機感を持っているが、他方、国家の権威に名を借りた集団主義や、意味のない過度な規律の押し付けは基本的に大キライ。軍隊においては、規律が何よりも大切なものであることはわかるものの、「国家首脳」を前にした軍事パレードで、足を45度まっすぐに挙げて均等に1.2メートル進み、縦、横、斜めのどこから見ても一直線になっている美しい姿を実現するために、非人間的な訓練をくり返す、「大閱兵」のための訓練はバカげており、大キライ。こんなことを若者に押しつけ、そこに価値を見出そうとする、権力者の発想には、ゾッとすることがある。しかし、この陳凱歌監督の『大閱兵』の映画では、それをどのように捉えて描いているのだろうか？

## ＜主人公の3人の新兵たち＞

天安門広場の閱兵式に参加するのは、陸軍、海軍、空軍で構成される人民解放軍から選ばれた兵士。これに選ばれることは最高の名誉であり、昇進のチャンスとなるもの。そして毛沢東国家主席をはじめ、党や政府の首脳陣の閱兵を受けるための行進は、当然一糸乱れぬ威風堂々としたものであることが要求される。

閱兵を受けるのは96歩、時間にしてわずか1分足らずの行進だが、そのための集団での訓練は苛酷を極めるもの。そこに参加した多くの若者のうち、この映画は3人の若者（新兵）に焦点をあてている。すなわち、①士官学校の入学を目指す呂純、②万元戸への入り婿を考えている劉国強、そして③テレビに映る自分の姿を母親に見てもらおう夢を描いているハオ小園、の3人だ。この若者たちが、苛酷な訓練に向き合う中で当然抱く疑問や心の葛藤、そして挫折しそうになっていく姿を陳凱歌監督は丹念に描いていく。そのため集団生活の中で、ややもすれば無視されがちな3人それぞれの個性が、この過程の中で見事に浮かびあがってくる。もっとも、この「大閱兵」に参加することの本当の意義をどのように位置づけるのかは、この映画からは明らかとはならないが、それはこのような国家体制にあることを前提として映画が作られている以上、やむをえないことだろう・・・。

## ＜意外にやさしい教官とベテラン兵士＞

他方この映画は、教官の人物像や新兵と教官との間に立つ2人のベテラン兵の個性も意外に克明に描かれていく。まず『黄色い大地』で八路軍文芸隊員の役でも出演した王学圻

が、長い戦歴をもちながらも格別の戦功をたてることができず、今回は最後のチャンスと思いながら若い兵士たちにやさしい目を注ぎ、若者たちから慕われるベテラン兵士、李偉成の役柄をうまくこなしている。もう一人は、教官と同じ戦場に出かけ、教官を救った体験を持つ、ベテラン兵士、江俊彪。そして、戦場での勲章を辞退し、今は後方で若者たちを訓練する教官の立場に引きこもっているのが教官の孫放。訓練の過程の中でおこるさまざまな軋轢の処理の中、語られなかった彼らの過去が少しずつ明らかにされていき、それとともに、「大閱兵」に向けての教官と兵士たちの心が一つになっていく過程は、人間ドラマとしても結構面白いものだ。

### <大閱兵は圧巻だが・・・>

映画の最後は、当然ながら、1984年10月1日の天安門広場での閲兵式のシーン。大きな音楽が鳴り、各部隊の精鋭が次々と登場し、まさに威風堂々と天安門広場を行進していくが、私はこういうものを見ていると、カッコいいとは思わず、逆にゾッとしてくる感じ。どうもこういう一色に染まった集団は生理的に受けつけられない体質なのかも・・・？しかし、この映画では、数カ月にわたる苛酷な訓練を受けた兵士たちは、心を一つにしてこの大閱兵に臨んだことはまちがいないようだ。それはそれでよしとするか・・・？

2004（平成16）年6月21日記